

[研究ノート]

共生を学ぶための多文化ツアーの可能性

渋谷 努

多文化ツアーの実例

はじめに

2005年には、ユネスコで「文化的表現の多様性と促進に関する条約」が採択され、文科省でも「文化的多様性に関する基本的な考え方」を提示して、文化的に多様である多文化状況を積極的に評価している（文化審議会 文化多様性に関する作業部会 2004）。しかし、多文化主義政策を取っていたオーストラリアで多文化主義が変容し保守化していったことが指摘されている（塩原 2010）。またヨーロッパでも反イスラームの感情の高まり、移民、難民の大量流入によって保守化が急激に進み始め、排外主義が影響力を持ち始めている。

日本の現状を見てみると、景気が少しずつ上向きになっており、また政府の人口減少対策としての積極的移民導入案もあり、これから外国籍住民の増加が推測できる。また近年ではヘイトスピーチが問題視されたように文化間での軋轢が生じ、ホスト社会の日本人の中で排他的な反応が高まりやすくなっている。

このような現状の中で日本の中でマジョリティ側である日本人側に対する多文化教育の必要性も意識されており、多文化教育や国際理解教育の中では、多文化化している日本社会の中で用いることができる教材が開発されている（松尾 2011）。また小中学校での日本で移民の置かれている状

況を理解するための教育的試みがまとめられている(森茂、中山 2008)。しかしこれまでの研究や実践では、一方では教室の中で用いられるテキスト上での理解に限定されてしまっており、身体的な経験に基づく理解に至ることは目的とされていない。他方では、扱う対象が一国であるなど異文化理解としてはふさわしいかもしれないが、多文化状況を理解する目的では不十分である。それに対し、筆者とそのゼミ生さらに市民団体が連携して実施運営を行なった本稿で紹介する「愛知多文化ツアー」プログラムでは、多文化状況を直接経験から知ることができるようになることを目標とした。そして愛知県での複数国籍の住民が抱える課題に関してツアー形式で現場に出て見学することから体感でき、さらに外国籍住民からのレクチャーを受けたりディスカッションを行なう内容となった。

本稿では、「多文化ツアー」を実施・運営した中で見えてきたことと参加者に対するアンケートの結果を踏まえて、多文化ツアーのような形態のスタディツアーが国際理解教育、特に多文化共生に関する学習プログラムとして果たすための課題とその潜在的な可能性について、スタディツアーと多文化共生に関する議論から課題を抽出し、実施した多文化ツアーの限界と可能性を明らかにする。

どのように学ぶのか：スタディツアーの特徴

多文化ツアーによって国際理解教育や開発教育にもたらすことができる貢献を考えるにあたって、すでに日本でも定着しているスタディツアーから学ぶことは有益だろう。スタディツアーとは、スタディツアー研究会によると、国際協力を目指す者への開発教育の一環として行われ、(1)知る：地球上に存在する問題や課題がつながっているという気づき。様々な課題や日本の暮らしと直接的・構造的につながっている。(2)考え：問題や課題と自分がつながっている。つまりそれらの課題を自分の問題としてとらえ、その背景に何があるか知り、学ぶ。そして(3)行動する：それらの問題や課

題の解決に向けて、自分のできることを考え、行動していこう（スタディツアー研究会 2017：29）と定義している。

以上を踏まえると、藤原が言うように、スタディツアーを、NGO（国際交流・協力の市民団体）、大学・学校、自治体、宗教団体などが、相互理解や体験学習を目的として行うツアーであり、内容的には、現地の状況やNGOによる活動に関する学習、現地の団体や人々との双方向的な交流などが可能なプログラムを持ったツアーとみなすことができる（藤原 2014：36）。国際協力の現場を訪問し自分の目で問題を学習、じかに人々と触れる生の交流が、書物やメディアの映像だけでは見られない臨場感のある体験をもたらすのである（スタディツアー研究会 2017：27）。

藤原は、スタディツアーの教育的効果を高めるためには、事前事後の学習、現地で見聞し、交流し、体験する中で得る学びの共有、そしてふりかえりがなされる必要性を主張している。そうすることで自己の実践的な変容とそのプロセスを伴うツアーとなり、グローバル社会の課題と展望、支え合いを生み出していく教育活動となりうる（藤原 2014：36）。

スタディツアーの内容を考えるために、藤原と栗山は、スタディツアーを観光旅行と比較している。つまりゲスト（参加者）の学びをどう創出するかとの問いのもと、旅行企画者を教師やツアー立案者に、観光者を学習者に、観光資源を教材に置き換え、旅行企画者や代理店が、現地の人々や訪問地であるホストをいかに観光資源とするか、すなわちツーリズムの課題を教育の文脈に置き換えることを提案している（藤原、栗山 2014：42）。

さらに林はスタディツアーでは「知る」「考える」といった事前事後学習及びツアーの中に省察を通して深め、それと「行動」することを相互に関連させていくプログラムが必要となる、と論じている（林 2010）。つまりスタディツアーに参加することを通じて、省察の対象として「知る」ことを深めるだけでなく、世界の状況を批判的に認識することが可能になる。個人で行う省察だけでなく、参加者同士、現地の人（コミュニティ住

民)などが共同で行う省察が重要になる。また省察を深めた参加者が「行動」することにつながられるようなプログラムを構築していく必要がある。

以上の点から、スタディツアーのカリキュラムには、あらかじめ計画されたプログラムに加えて、事前学習をとおして獲得された知識と現地での体験による「学び」とを結合させていく学習方法及び学習支援が重要である。それは、引率者の解説や説明によるものだけではない。参加者が、現地の社会状況にコミットし、コミュニティの人々、学生との交流の中で生成される学びでありカリキュラムである。多文化ツアーを行うにあたって、ツアー内のコンテンツをより交流を含め体験型としながら、事前事後の省察の機会を持つ必要があることがわかる。

何を伝えるか：多文化な状態とは

多文化ツアーを行う際に何を「多文化」として、そして「共生」として参加者に伝えるのか、つまりコンテンツをどうするかという問題がある。コンテンツの問題を考えるために、これまで行われてきた多文化共生に関する議論を概観してみよう。

これまで多文化共生や多文化を理解するといった場合、ブラジルやフィリピンといった個別文化を理解することを意味しており、文化をステレオタイプ的に固定化して捉える本質主義的に理解することが多かった。

また研究者の間では、概念として、そして施策の方向性として「多文化共生」に対して批判がなされている。これまでなされてきた「多文化共生」に対する批判を、大きく二つに分けることができる。一つは「文化」の捉え方であり、もう一つは共生に示される社会的状況への立ち位置に関するものである。「文化」のとらえ方に関しては、その文化観が本質主義的なものだという批判がある。すなわち、これまで文化を民族や国民とのみ結びつけて考えていた。文化の境界と民族、国民の境界を重ねて考えてしまい、そのカテゴリー内に見られる地域、性別、年齢などによる違いから生

じる重層性や文化が変化していき、構築されていくものだという性格に注意を向けていない。そこで、文化を「純粹」な固定したものと捉えてしまった。

佐藤は、これまでは異文化や外国人を他者化することで「日本人」という枠をつくり、しかも「日本人」としての優位性をも作り上げてきた点を指摘した。そこで貧困、難民、開発といった地球的課題の学習でこうした二項対立の枠組みを前提にしたのでは、「自文化」や「日本」の優位性を作り上げる結果になってしまい、国際理解教育の中で多文化状況を理解する必要性を主張している（佐藤 2007：221）。

さらに、現状認識の仕方及びその認識に基づいた現状に対する立ち位置に関する批判も行われている。つまり、共生という言葉には構造的差別や不平等を覆い隠すという批判もされている。竹沢は、日本の多文化共生では、多文化が3F「衣 fashion」「食 food」「祭 festival」に還元されがちである点を指摘している。続けて、このような3Fを積極的に打ち出すイベントを多文化共生の啓発事業と位置付けるなら、幅広い層の日本人の理解を深める上で役割を果たしてきたと一定の評価をしながらも、これらの華やかな側面に光が当たるなか、構造的差別や偏見等が影となり覆い隠されて、さらにそれらの文化が単なる消費の対象とされたり、政治的に利用されることもあると批判している（竹沢 2011：5）。つまり樋口が論じるように「多文化の楽しさ」の強調は、「楽しくない」部分をなぜ外国人が背負われるのかという、社会構造に関わる問いを無視する結果につながりかねない（樋口 2006：33）。そうであるがゆえに、既存の権力関係を等閑に付す構造的暴力（ファーマー 2012）を後押しする可能性がある。

このような異文化に対する本質主義的な見解を避けるとともに自文化に対しても相対的な見方を取れるようなプログラムづくりが必要になるとともにホスト社会側が加害者になりかねないという権力関係も意識できるようになる必要がある。以上のことを踏まえてスタディツアーの特徴を生か

しながら多文化な状況を知るためのツアーとしては、

- 1 マジョリティ・マイノリティの権力関係に気づく
- 2 マイノリティになりがちな外国にルーツを持つ人々の差別状況、
困難さの認識を高める
- 3 日本社会に対して批判的に見ることができる
- 4 現場で上記のことを経験し学ぶ
- 5 その上でさらなる行動につなげる

という5点に注意しコンテンツを開発していく必要がある。

準備段階

多文化ツアーのプロジェクトは、2015年秋に今回共同で実施した名古屋市内で活動している市民団体 Dive TV との話し合いの中から生まれた。そこで、翌年度の演習の授業では外国籍住民のうち愛知県内で人口の多いコリアン、中国、ブラジル、フィリピンのことについて文献調査を行い、さらに支援団体や自助団体を対象とした参与観察及び聞き取り調査を行った。これらの授業を通して、ゼミ生の間での愛知県内に住む外国籍住民の状況について理解を深めた。また、その過程で、今回朝鮮初級学校で手伝ってくれた東海4県の在日コリアン学生の団体である留学同東海と知り合い、施設案内とレクチャーを依頼した。

それ以外のコンテンツに関しては、ツアー日程が土日となったために、週末に活動している団体や個人を探して、Dive TV の牧野さんにも協力を依頼しながら進めていった。

ツアーの概要

2016年12月10日から11日に多文化ツアーを実施した。図1からわかるように、今回のツアーでは初日に大学生が32名、2日目に26名が参加した。これらの学生は中京大学渋谷ゼミ、東北学院大学からのゼミ、東海

12月10日	13時	名古屋駅前集合
	13時半～16時	名古屋朝鮮初級学校で留学同代表によるレクチャー、グループディスカッション、及び校内の見学
	16時半～17時半	栄のフィリピン雑貨店、レストランで食事
	18時半～	中京大学豊田キャンパスで1日の振り返りと情報交換
12月11日	9時～10時半	保見団地内でブラジル人学校（ネクター）代表によるレクチャー
	10時半～12時	保見団地内の散策
	13時頃	名古屋駅到着 解散

参加者 中京大学 16名（内 初日のみ2名）
 東北学院大学 3名
 東海大学 11名（内 初日のみ4名）
 長崎大学 2名
 初日 32名 二日目 26名 + （教員3名 + 支援団体1名）

図1 第一回あいち多文化ツアー概要

大学からのゼミ、長崎大学からのゼミの学生が参加している。この学生たちはゼミやその他の授業の中で日本における移民問題や多文化共生に関する授業を受けており、日本における外国人問題の基礎的な知識を持ったものが多く参加していると想定できる。

次に、図1にもとづき今回のツアーの内容について論じる。1日目に名古屋駅に集合したのちに、徒歩で名古屋朝鮮初級学校に移動した。初級学校では、留学同東海の大学生に迎えてもらった。留学同東海の学生の中には、この初級学校の卒業生もあり、彼らに案内役をお願いし最初に学校の見学を行った。授業時間であったので、授業中の様子を廊下から見学することができた。廊下には学校に通っている子供たちが書いた絵などの作品が掲示されているが、それらがハングル文字で書かれていることに驚き、

違和感を感じた学生もいた。このような差異への気づきは、空き教室に入っていくとなおさら感じられる。教室内の机や椅子は、大学生にとってみたら自分の腰にまでも届かないサイズであり、それが自分の小学生の頃のサイズを想起させ、自分も経験したことでありこの教室の中で勉強している子供たちとの共通点を見出せる。しかし、教室内の壁に貼られているものを見るとそこにはハングルで書かれており、自分たちの経験とは明確に異なる世界がそこにあることに気がつくこととなる。

校舎を上がっていくと、階段の壁には遠足や修学旅行、運動会での写真が貼られている。校舎の最上階は体育館であり、その横に置いてある朝鮮舞踊などの際に用いられる楽器を見せてもらった。校舎内を歩いていると、子供たちにすれ違うがハングル語で話しかけてくれる子がいるかと思えば、「今日は」、と日本語で話しかけてくる子もいた。

施設内の見学の後、図書館の部屋を貸していただき、留学同東海のキム・スリョルさんから在日の歴史から現在の問題までを当事者の立場から語ってもらった。朝鮮半島からの移住が日本による植民地支配をきっかけとしていることや、関東大震災後の朝鮮出身者への殺害といった歴史的経緯について、さらに現代での問題点としてヘイトスピーチや朝鮮学校無償化問題について紹介してもらった。

その後、一グループ5-6人程度に分かれてもらい、それぞれのグループに少なくとも一人ずつのコリアンの大学生に入ってもらいグループディスカッションを行なった。また、できるだけ一つのグループが1大学の学生に限定されないように配慮した。アイスブレイクとしての自己紹介をした上で、多様な人が住みよい社会になるためには何が必要か、という問題の元でグループディスカッションを行なった。その後、グループごとに意見をまとめて代表ごとに提言をしてもらった。

その後、繁華街でありフィリピン人の多くの方が就労している地区である栄に移動した。フィリピンパブなどが集まっている地区にある食堂「カ

イビガン」にいった。

1日目の最後に、中京大学に行きその日の振り返りとして、中京大学渋谷ゼミの学生による、名古屋市内での外国籍住民の状況について、出身国別に報告を行なった。その後他大学での活動内容の報告が行われ、その日を振り返って感想を共有した。

2日目には、日本でもブラジル出身者が集住していることで知られる保見団地に行った。保見団地では、普段は子供達に対して日本語教室や教科書学習支援活動が行われたり、大人向けの日本語教室が行われている集会所内でブラジル人学校ネクター代表の山家さんに話をさせていただいた。

この場所には、普段の教室で使われている日本語を学ぶための基本的な教科書であったり、小学校の国語の教科書が置かれていたり、国語の辞書さらに絵本も置かれている。その一方で、ポルトガル語やスペイン語と日本語の辞書があったりもする。このような本を見ているだけでも、学生たちは小学校の自分たちを思い出し、教科書を手にとって懐かしいというものもあれば、自分の第二外国語として学んでいる辞書を手取る者もいる。

山家さんの話をはじめ。彼女自身が保見団地で育ち、大学で東京に行ったのち保見に戻り、母親の跡を継ぎブラジル出身の子供達のために学校を運営している。山家さんの話は、自分の幼年期からの経験とともに、ブラジル人の子供達が置かれている状況について説明し、ブラジル人学校として取り組んでいる親子関係をより強いものにするためのキャンプの企画などの話をしてくれた。

その後、参加者は二班に分かれ、団地内を散策し、団地内にあるショッピングセンターを訪れ、キャッサバや外来の豆類など日本ではあまり見かけない食材が売られているのを見たり、団地内の標識が日本語とポルトガル語の二言語表記になっているものやゴミ集積所が普段は鍵がかけられており、指定曜日と時間に飲みゴミが出せるようになっているゴミステーション

ンを見学した。

以上が、1 回目の多文化ツアーの概要である。

参加者の声

次に、参加者が今回のツアーに参加した学生の反応をまとめてみよう。以下で紹介するのは、ツアー直後に参加者に回答してもらったアンケート結果に基づく。回答者数は、2 日間参加した 26 名である。

最初に、今回のツアーで主な要素である、1 日目の朝鮮初級学校での留学同によるプレゼンとディスカッションに関して、同日夜のフィリピンでの食堂、2 日目保見団地でのブラジル人学校とその集住地域、それぞれの内容の満足度を尋ねた。その結果を平均にすると、表 1 のようになる。

この結果から見ると、内容的に当事者からのレクチャーが行われた留学同や保見団地での内容の評価が高いことがわかる。これは、今回のツアーの参加者の多くが授業の一環で来ているために、このように「硬い」内容のものを高く評価した可能性がある。

さらに参加者からの具体的な意見を聞くために、今回のツアーで学んだことの中で最も印象的なものを自由記述で書いてもらった。26 人中 25 人が回答した。保見団地でのブラジル人に関して書いている場合が 12 例、在日コリアンについて書いてある場合が 9 例、ツアー全体での外国籍住民とのふれあいから得たものをあげる場合が 3 例、東京と愛知県での違いについて言及したものが 1 例あった。

コリアンやブラジル人に関して学んだこととしてあげられる内容は、レクチャーの内容に大きく関与していた。コリアンに関するコメントとして

表 1 アンケート結果

留学同	フィリピン	保見団地
4,6	3,9	4,3

は、「朝鮮学校の運営の為に名古屋市からの予算が年々減っているということが最も印象的でした。市が外国人教育に積極的ではないという事実。」といった朝鮮学校の無償化に関する問題について言及するものもあれば、「関東大震災の時に日本人が、朝鮮人を大量に殺したという事実は初めて聞いたので本当に驚きました。」といった歴史的背景についての新たな情報が得られたことをあげるものもいた。国籍の問題やかつての社会保障の不十分さなどに関わる「在日コリアンの人の立ち位置」や「在日コリアンの方達に対するヘイトスピーチ」をあげたものもいた。

これらの内容については、参加者は事前にテキストや授業などで知っていたかもしれないが、朝鮮学校という場で当事者（またはその子孫）によって、特にライフヒストリーや家族のヒストリーの中に位置付けられて聞くことによって、受けた印象が大きくなったのだろう。

保見団地のブラジル人について言及したものの中でもレクチャーの内容に関わる、「在日ブラジル人とその子供達の言語における取り組みと問題点。2言語を使用した教育の内容。」といった母語教育や言語教育に言及したものがあつた。さらに、「どう誇りやアイデンティティにつながることを教えているのか、をそれぞれどう思っているのかを聞いてよかった。」といった日本で育った第二世代の教育とアイデンティティの問題に関して気付かされたものがいた。

外国人問題における地域差を述べたものは、「東京と比べて観光客ではなく、そこで暮らしている外国にルーツのある人の多さ」といっている。また、保見団地での山家さんの話の中でも、愛知の中で「ブラジル人」は問題を引き起こすトラブルメーカーというイメージがあるのに対し、大学時代に過ごした東京では、ブラジル人というとサンバやサッカーのイメージから「かっこいい」とプラスの評価を受けたことを語った。そのことは、話を聞いていた学生の間でも共感をえていた。

コリアン及びブラジル人についてのコメントの中でも、共通して多く出

てくるのが、ツアー地で実際に経験したことを上げている例である。「実際に、在日朝鮮人の方とお話しできて、どんな事を考え、思い、生活しているのか、今回のツアーがなければ、知ることができなかった。在日の方の居場所がわからないという言葉がとても胸に残った。」といったように、直接話し合うことで、コリアンが置かれている状況について体験を通じた理解が生じている。

保見団地の場合は、団地全体の巨大さとそこにブラジル人が集住している事実を、ツアーにより経験を通して把握していることがわかる。「今回のツアーで最も印象的だったのは、保見団地のブラジル人のことについてでした。自分が想像していたよりも多くのブラジルの人が団地のところのスーパーなどにいたので驚いた。」「今までブラジル人が多いことは知っていたが、保見団地にはブラジル人が多く住み、日本ではないような空間になっていることを体感しました。」といった日本の中の外国人コミュニティの存在を再認識しており、「保見団地へ行って実際にブラジル人の人が住んでいる場所を見れて、掲示物がポルトガル語でも書かれていたのが印象に残った。」二言語表記などの行政や地域社会の取り組みについても気づきもあった。

地域に関係なく、当事者にその場で出会い語らう経験の重要性を述べるものもいた。「当事者の方から直接話を聞ける貴重な機会であったこと。話を聞く前と後では物事に対するイメージ、考え方が大きく変わり、このツアーの参加して良かったと思った。」というような直接経験の重要性に基づいて、ステレオタイプにとらわれず「互いに個人を理解する必要性」を感じ取ったものもいた。

このような当事者との直接体験を共有することの重要さは、今後多文化ツアーを改善するための改良点を問うた欄での記述の中で、「外国にルーツのある人たちとの関わり（コミュニケーション）をもっと増やしたかった」といった当事者との関わりをもっと増やして欲しいという意見が多数

あった点からもわかる。さらに「実際に子供と触れ合える機会があればよかった。勉強を教えるのを手伝ったり、「見学」という形以上で直接触れ合える場があれば、より身近に感じられたかかなと思いました。」というように、見学以上に日本語を教えるなどといった経験を求める場合もある。このような、当事者との直接経験を求めていることは、今回のツアーで得た経験に基づくさらなる理解のための要求と考えることができる。

「朝鮮学校に着いてすぐ、幼稚園生が朝鮮語、日本語、手話を披露してくれた時が一番印象的でした。実際に経験したことをたくさん聞いて普段知ることのできないことを知れてよかったです。」というコメントからわかるように、実際に朝鮮初級学校に行ったからこそ得られた知識があることが述べられている。「私たちが思っている在日外国人のイメージと実際のイメージは違っていたりして、こうやってツアーを通して、悩みだったり、取り組んでいることを知れて良かった。（朝鮮学校にて）」という意見から、実際に現地に行き当事者に触れることで、いわゆるステレオタイプとしての「偏見」から脱して、自分たちがしらなければいけない課題に触れる経験すなわち省察のレベルでの学習段階になっている者もあり、今回の多文化ツアーの教育的効果を示している。

終わりに：多文化ツアーの自己評価

今回の多文化ツアーを上記のような課題と照らし合わせて評価してみよう。P125で述べた多文化ツアーの課題において2・3・4に関しては、ある程度の学習及び経験の機会となっていると言える。朝鮮初級学校での留学同によるレクチャーとディスカッション、二日目に保見団地で行なった山家さんによるレクチャーによって、外国にルーツを持つ方が置かれている状況について知識を得るとともに、その後のディスカッションや朝鮮初級学校、保見団地内での散策によって実際の経験によって細くすることができた。これらの点により、外国にルーツを持つ方の置かれた現状や困難

な状況について提示することができたと言える。また、日本の中での地域差を意識することができ、現状を批判的に見る省察の段階にいたったものもいた。

1のマジョリティ・マイノリティ関係についてであるが、朝鮮初級学校でのレクチャーの中で植民地支配の話が行われており、知識としては提供されている。また山家さんからの話の中でもブラジル人指定の学習が困難状況に関する話でも、その困難状況を作り出している日本の政策や行政のあり方に関して、すなわち、マイノリティが置かれている「構造的暴力」(ファーマー 2012)をほのめかしている部分はあった。しかし、参加者へのコメントの中では、マジョリティである日本人側が持つ権力性や構造的暴力から生み出される社会的な困難や差別に言及するものはなかった。

事前学習をする機会や、事後学習をする食うも今回は設定することができなかった。さらに、学習した上で行動に向かわせるような「仕掛け」を設けることはできなかった。「構造的暴力」を体感的に理解できるようなコンテンツを開発していく必要がある。

引用文献

- 佐藤郡衛 2007 「国際理解教育の現状と課題ー教育実践の新たな視点を求めてー」『教育学研究』74-2、77-87。
- 塩原良和 2010 『変革する多文化主義へ』法政大学出版社。
- スタディツアー研究会 2017 『実践的スタディツアー学』スタディツアー研究会。
- 竹沢泰子 2011 「序論 移民研究から多文化共生を考える」日本移民学会編 『移民研究と多文化共生』御茶の水書房 1-17。
- 林加奈子 2010 「開発教育としてのスタディツアー再考ー省察と行動の視点から」『開発教育』57、183-198。
- 樋口直人 2006 「多民族社会の境界設定とエスニック・ビジネス」『国立民族学博物館調査報告』64、33-43。
- 藤原孝章 2014 「海外研修・スタディツアーと国際理解教育 特定課題研究往路ジェクトについて」『国際理解教育』、20、36-41。

藤原孝章、栗山丈弘 2014 「スタディツアーにおけるプログラムづくり」『国際理解教育』、20、42-50。

文化審議会 文化多様性に関する作業部会 2004 「文化多様性に関する基本的な考え方について」

ポール・ファーマー 2012 『権力の病理』（豊田英子訳）、みすず書房。

松尾知明 2011 『多文化共生のためのテキストブック』、明石書店。

森茂岳雄、中山京子 2008 『日系移民学習の理論と実践』、明石書店。